

平成18年度病害虫発生予察特殊報第3号

平成18年11月15日

埼玉県病害虫防除所

ユリにおけるイチゴセンチュウの発生について

Aphelenchoides fragariae (Ritzema Bos) Christie

1 発生経過

平成18年7月下旬、県内で栽培されている切り花のユリに、①花飛び、②下位葉の黄化等を生じた。

このため、被害株を採取して農林総合研究センター園芸研究所に分離・診断を依頼した結果、葉の黄化部分から大量のセンチュウが分離された。

このセンチュウを中央農業総合研究センター病害虫検出同定法研究チームに同定を依頼したところ、「イチゴセンチュウ」と判明した。

2 形態及び発生生態

(1) 形態

本センチュウの体長は0.6~0.9mmと細長く、口針が体長に比べ短い。その他、頭部の体環はキャップ状である、尾端の微小突起が1本、雄成虫の体は総排泄口の直前で腹側に急激に湾曲する等の形態的特徴がある。

(2) 発生状況及び生態

日本では、1951年に静岡県のイチゴで初発生が認められ、イチゴ以外でもワサビ、キク、シャクヤク、センリョウ、ブバルディア、ベゴニア、ボタン、などに寄生することが確認されている。なお、ユリは1980年に北海道で初発生している。

ユリでの生活史は芽や葉に寄生し、保虫母球から子球に伝搬する。降雨や灌水など水を媒介して被害株から健全株へ移動し、被害が拡大する。

(3) 被害

生育途中に下位葉から黄化・枯死し、上中位葉では葉のねじれる奇形が発生する。さらに、花飛びが生じることにより、生花としての商品価値が失われる。

3 防除対策等

(1) ユリに登録のある殺線虫剤はない。

(2) 被害株は抜き取るとともに、被害葉・球根等の残渣は屋外に持ち出し処分する。

(3) 被害が多い場合は土壌消毒を行う。

< 参 考 >



写真1 被害株の全景（下位葉の黄化）



写真2 被害株の上位葉（花飛び）